

られた。

九月十二日、牡丹江省愛河でソ連の貨車に詰め込まれ、綏芬河を経てソ連領に連行された。同月末、コムソモリスクの第一收容所に抑留され、倉庫状の大型板張りの建物の二段ベッドで起居した。当初の抑留人数は一千人程度であったが、最多時には五千人にもなった。

同年十一月末、百五十人ほどの作業隊に組み込まれ、建設と煉瓦用の粘土採取作業に従事させられた。過重なノルマを免れるため建設基礎工事では手抜き作業をしたが、恩恵も処罰も受けなかった。発疹チフスは発生しなかったが、シラミには悩まされ、煉瓦工場の釜で衣服を煮て退治し、当初たらい一杯の湯で身を洗ったが、その後入浴できた。

收容所の管理方法は判明しないが、労働に耐えられぬ者には、軽作業に回され休日もあった。衣服のうち下着はソ連製のもので、防寒具は日本軍のものが支給された。食糧は雑穀が主で、塩蔵羊肉・魚、凍結馬鈴薯が与えられたが、量は少なく、不足分は雑草で補った。

た。

抑留一カ月後に洗脳教育が行われた。移動後はなかったが、日本人同士の吊るし上げはあった。

二十二年十月末、帰還するまでの二年二カ月間、生への執念を高め、劣悪な環境に耐えるため全力を尽くしたが、アメーバ赤痢再発し、入院加療し事なきを得て十一月九日、函館に上陸、復員した。

二十三年二月から大津村浦幌町役場に勤め、四十九年から五十四年まで浦幌町の林業会社に再就職。五十八年四月まで浦幌町嘱託となり、同年五月退職、札幌に移住し現在に至っており、全抑協北海道支部役員をやっている。

ハバロフスクでの苦闘

北海道 太田 隆夫

大正十三年九月、北海道美唄市で農協職員の父、五ヘクタールの田畑耕作の母との間に四男三女の長男と

して出生。奈良江高小卒業後、家業を手伝いながら地元青年学校研究科を昭和十九年三月に卒業した。

同年九月、旭川の歩兵部隊に現役入隊直後、北滿ジャムスの満州第三九〇九部隊第二機関銃隊に転属となった。

沖繩方面の戦局悪化のため、在満部隊の大半は二十一年に入って南方に移動したが、私は体調不振で残留となり、対ソ戦に備え方正の山中で塹壕構築に専念させられた。

同年八月、ソ連軍の侵攻を受け、武装解除され、方正近郊で一カ月間、野宿を強制された。

終戦放送は確認できず、デマが飛び交う中、飢えのため食べ物あさが続いた。

同年九月中旬、行軍による部隊移動が始まり、二日後にはアムール川を船で遡上し、ハバロフスクのラーゲリに収容された。

バラック内は三段の蚕棚式ベッドで、重油を燃やして暖、明かりをとり、煤で真っ黒。虱攻めと食糧不足寒さに耐え切れずに生地獄を味わった。

労働はレンガ運搬、戦車工場、食糧倉庫での雑役で、ノルマの厳しいレンガ工場でのサボタージュがたつてラーゲリを移動させられた。移動先の荷役作業中、崩落した積荷の下敷きとなり、腰部と右下肢を負傷し入院する羽目となった。入院先はハバロフスク西方の馬小屋改造の半地下式病院で、ソ連軍女医の下で日本軍医もあり、病室には百名近くの日本人重軽傷患者が収容されていた。

伐採による骨折や栄養失調患者が次々と息絶え、氷上に積み重ねられ、被せられた枝木とともにガソリンで焼かれるのを毎日見ながら、湿布と注射による治療も効かず、痛みと熱で日に増し痩せ衰える我が身で、帰国が果たせるか否か不安が募るばかりだった。

しかも、同胞が黒パンをかじりながら死んだ体に真っ白にたかる虱の山、麻酔なしの手術で断末魔の叫び声を聞くにつれて地獄さながらの思いを味わい、帰還を一縷の望みに託して身の保全に意を注いだ。

「軽患者から優先帰国させる」との噂に、発熱をひた隠しに隠して待ち続け、ナホトカに集結でき、二十

三年七月、復員船「高砂丸」に乗船でき、激しい船酔いで食事もできず、船内平穩の中、ようやく舞鶴に上陸し帰還を果たすことができた。

直ちに入院との医師の言を断り、診断書をもらい、故郷での入院を決めた。

我が家では一家挙げて帰還を喜んだが、ようやく歩ける程度なので自宅で静養していたが、腰椎カリエスと右肢関節炎が悪化し、自宅で治療し松葉杖で歩行可能になるまで十年を要した。

シベリア抑留記

福島県 石黒庄 七

出生から入隊

大正八年三月十八日、旧田村郡中郷村大字滝字高野九六番地、石黒家に長男として生まれ、昭和九年、中郷小学校高等科を卒業。その後農業に従事。青年学校に入学。

昭和十四年徴兵検査を受け、甲種合格。昭和十五年一月十日、朝鮮咸興歩兵第七十四連隊歩兵砲中隊に入隊。

昭和十六年七月、虎動員当時被服係をやっていたので補充隊へ。昭和十七年十一月満期除隊。帰郷後、在郷軍人会役員、青年学校指導員等を歴任。

昭和十九年二月十八日召集。会津若松勲一一九〇三部隊末田中隊に入隊。三月六日、千島列島の新知島新知湾に上陸、新月原中浦地区に駐屯。同年九月ごろ、得撫島に転進。三島湾上陸。速射砲第四分隊長とした隊員十七名とともに第三中隊に配属。三島湾に陣地を構築、警備に当たる。

昭和二十年八月、北海道に転進命令。八月十五日、同島において終戦。

ソ連軍侵攻前後

九月ごろ、三島湾に黒い船が入港。こちらから白旗を立てた大発が交渉に行き、二時間くらいで帰る。すぐ武装解除命令で、明日、小銃、銃剣その他を背負ってしのため原に搬入、武装解除。その次の日、ソ連軍